

特集にあたって

「五輪開催と国の発展」好機を逸した開催前のブラジル

近田 亮平

今年四月二一日の朝、筆者はブラジルのリオデジャネイロ（以下、リオ）の国際空港に到着した。筆者がブラジルを訪問した目的は、今年の八月からリオで開催される南米大陸初の夏季五輪とパラリンピック（以下、「五輪」）について調査することであった。朝到着の便だったためか、リオの空港の出口付近には人が少なく、出口の壁に五輪のマスコットが描かれていたが、ドア自体にはポスターなどは張られておらず、五輪で盛り上がっている印象はあまり受けなかった（写真1）。

筆者の受けたこの印象は、五輪を前にしたブラジルが置かれている状況を端的に表していたといえるよう。なぜなら最近のブラジルは、二〇一五年のGDP成長率がマイナス三・八%を記録するなど経済は停滞し（今年の見通しもマイナ

ス成長であり、そうなると統計のある二〇世紀半ば以降で最悪の景気低迷）、昨年末からルセフ大統領の弾劾手続きが進められたり、石油公社ペトロbrasをめぐると野党議員入り乱れての一大汚職事件が発覚したりして政治的にも混乱している。また、これに反応する人々で反政府や政府支持派のデモが全国各地で実施され、さらには、豚インフルや蚊を媒介とするジカ熱が流行するなど、まさに「泣き面に蚊」な状態に陥っている。つまり、国として五輪を成功裏に開催できるのかという懸念が国内外で高まり、また、国民の関心も迷走する自国の政治経済状況に集中し、筆者が訪れたブラジルには「五輪どころではない」雰囲気蔓延していたのである。

ブラジルが五輪開催を獲得できた背景には、一九八〇年代の軍政から民政移管以降の民主化の定着、一九九〇年代以降の経済の安定と成長、二一世紀初頭の社会における貧困や格差の是正、そして、これらポジティブな変化をもとにした外交でのプレゼンスの増大が挙げられる。つまり、ブラジルは国としての発展や構造的な変容を遂げ、南米地域や新興途上国のリーダーの一角として台頭したことから、二〇一六年五輪の招致に成功したのである（参考文献①）。

しかし、最近のブラジルの状況は前述どおりである。現地での調査を終え筆者が日本へ帰国した五月二二日には、「裸の女王様」（参考文献①）と化したルセフ大統領は弾劾審議により一時停職に追い込まれ、テメル副大統領が昇格し暫定政権が発足した。つまり五輪開催を前にしたブラジルは、国のさらなる発展や国力の国内外への誇示に活用し得る五輪を、残念ながらそれとは逆に、国の混乱や国力の低下を露呈するような機会にしてしまっているのである。

本特集の関心は、五輪開催が国としての発展においてどう位置づけられたかにある。具体的には、今年五輪を開催するブラジル、すでに五輪を開催した新興国や途上国と呼ばれる国々のメキシコ、韓国、中国を取り上げる。さらに、リオの次の五輪開催地が東京であることを鑑み、過去に一度五輪を開催した日本を含め、それぞれの執筆者の専門から五輪開催および国としての発展について論じる。

本特集の内容は、今回の五輪開催国であるブラジルとそれ以外の



写真1 今回の調査で到着したリオの国際空港の出口（筆者撮影）



写真2 リオの街角で珍しく見かけた五輪のポスター (筆者撮影)

一方、治安の悪化や都市インフラの老朽化が顕著となり、通称「Marvelous City (Cidade Maravilhosa)」とい

国々の二つに大別される。ブラジルに関して、まず、政治と切り離すことのできない同国の五輪やサッカーの歴史を変遷し、ブラジルにおける「スポーツの政治学」について論じる。つぎに、五輪を前にしたブラジルで行われているスポーツを通じた社会的促進の試みを紹介する。その際、五輪開催都市であるリオ市政府が貧困層居住区に設置した「五輪村」の事例を主に取り上げる。また、五輪は国だけでなく都市としての開催であることから、五輪をめぐるリオの変容について交通インフラを中心に解説する。リオは一七六三年に植民地の首府となつて以降、一九六〇年に首都がブラジリアへ遷都されるまで、長きにわたりブラジルの首都または中心都市であった。しかし、筆者が研究のため二〇〇五年から二年間滞在した頃のリオは、すでに政治の中心ではなく、経済はサンパウロへ集中す

われる輝きを失いかけていた。五輪をめぐるリオの変容については、本誌の「フォトエッセイ」でも紹介する。さらに、国としての発展という観点から、五輪開催前のブラジルの政治と経済の情勢についてそれぞれ解説する。

後半では、まずメキシコについて、同国が「途上国」としての初の五輪開催を獲得した背景を明らかにしたうえで、「途上国」が自国の能力を超えてまで五輪を開催する必要に対して疑問を投じる。つぎの韓国については、同国が困難な五輪招致戦、高度経済成長、民主化を経て、五輪に関するすべての目標を達成し、「めざましく発展を遂げた韓国の姿」に世界が驚嘆したと結んでいる。中国については、五輪開催時に現地に駐在していた筆者の体験も踏まえ、強い政府のイニシアティブにより中国の繁栄を世界に示すという目標は達成されたと論じている。そして、五輪を東京で二度開催する日本に関して、一九六四年の五輪を敗戦後の復興や高度経済成長という国の発展に活用した経験を振り返り、リオ後の二〇二〇年五輪について国際的なメガイベントを実施する課題を指摘する。

ブラジルのリオ五輪に関して、開催年である二〇一六年一年間の経済効果(二〇〇八年の米ドル換算)は一四億米ドルに達するとの試算があり、これは一九九六年のアトランタから二〇一二年のロンドンまでの五輪の事前予想を上回る金額である(参考文献②)。また、二〇〇三年に約四一三万人だったブラジルへの外国人観光客の数も、サッカーW杯のあった二〇一四年に約六四三万人へと増加し(ブラジル観光省)、五輪が開催される今年にも期待が寄せられている。しかし、五輪開催という国の発展にとつての好機をブラジルがいかか逸しているかを、特に本特集の韓国、中国、第一回目の東京との比較から理解することができよう。筆者は、五輪よりも大統領の弾劾や景気低迷が話題となっていたブラジルに滞在中、リオの街角で珍しく五輪のポスターをみかけた(写真2)。そこには「私は昇る。(写真2)。そこには「私は昇る。私の階段になってくれ」と書かれていた。はたしてブラジルは、五輪を機に国としてこれから昇って行けるのであろうか。もしそうであれば、今のブラジルが昇るための「階段」となるのは何か、または、誰なのであろうか。新たに誕

《参考文献》

- ① Konta, Ryohhei ed. *The Post-New Brazil*. Tokyo: IDE-JETRO, 2015.
- ② Bastos, Estêvão K. X. "Impacto de grandes eventos esportivos no Brasil." presentation paper, IPEA, 29 de abril, 2016.